



Title	アルムアッラカート訳了のあとがき
Author(s)	池田, 修
Citation	アラブ・イスラム研究. 2009, 7, p. 15-21
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105890
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ムアッラカート訳了のあとがき

池田 修*

(一)

イスラームが興るより前の時代はジャーヒリーア (jahiliya) 時代と呼ばれている。この呼び名はコーランに由来するものである。コーランにはジャーヒリーアという語が4回用いられているが、そのひとつ第48章26節では“背信者たちが彼らの心中に、獐猛な心、つまりジャーヒリーア時代の獐猛な心を抱いたとき、神は使徒と信者たちに静寂を下したもうて、自制のみ言葉をしっかりともしたもうた。”とある。即ち、いまだ神の啓示が下されていなくて、偶像崇拜が広く行われ、部族間の闘争が絶えない時代を指して用いられている。従って理論的にいえばアラブの歴史が始まってからイスラーム時代を迎えるまでの長い期間がジャーヒリーア時代ということになる。しかしアラブの最古の文学作品とみなされているものは、イスラームが興るよりせいぜい 50年前にさかのぼるにすぎず、それ以前のものは伝えられていない。

従って、ジャーヒリーアのアラブ文学と言えばこの短い期間の文学ということになる。その中心をなすものは詩であるが、口伝によって伝えられイスラーム時代に収集され編纂されたため、多くのものが失われたり、変容されているといわれている。今日まで伝えられている最古の詩は490年ごろタグリブ部族とバクル部族との間で起こった40年に及ぶバスースの戦いに関するアルムハルヒル (531年ごろ没) の長詩といわれている。この詩人の本名はアディー・ブヌ・ラビーア・アッタグリビー (‘Adī b. Rabī‘a al-Taghribī) で、アルムアッラカート詩人イムルウ・ル・カイスの叔父にあたると言う説もある。

ジャーヒリーア時代の文化はイラクのアルヒーラ (al-Hira) によったラフム朝とシリアによったガッサーン朝において最高度に発展し、それぞれの拠点からアラビア全体に影響を及ぼした。多くの詩人が両王国のいずれかと関係を持ったが、アルムアッラカート詩人達も例外ではなかった。

ラフム朝

3世紀イエーメン系の南アラブのいくつかの部族が連合してタヌーフ (Tanūkh) と名乗り、サーサーン朝の政治的混乱に乗じてイラクに侵入し、ユーフラテス河西岸に住み着いた。一部の者は遊牧生活を続けたが、他の者達は農業をはじめ、次第に村落を発展させた。そのなかで特に重要なのがアルヒーラという町であった。

* 四天王寺大学 客員教授

al-Hīra はシリア語の herta (駐屯地) に由来する。ジャーヒリーア時代に関する伝承に明かったヒシャーム・ブヌ・ムハンマド・アルカルビー (Hishām b. Muḥammad al-Kalbī 819又は821没) によれば、サーサーン朝初代皇帝アルダシール・ババカーン (Ardashīr Babakān 在位226-241) のころ、アルヒーラの住民は次の3種よりなっていた。

- (1) タヌーフ (Tanūkh) : アルヒーラとアンバールの間のユーフラテス西岸でデント生活をしていた
- (2) イバード (ʿIbād) : アルヒーラの町に住んでいた。
- (3) アフラーフ (ʿAhlāf) : 前者2者に属さない住民で、血の復讐を避けようとした逃亡者や貧者などよりなる。

この中でイバードが最も影響力があった。彼らはキリスト教徒でアラブのさまざまな部族出身者よりなっていた。ジャーヒリーア時代に血縁によらず、信仰による精神的結合集団がアルヒーラに存在していたことは注目される。彼らの宗教や文化が様々なチャンネルを通じてアラビア半島の奥地に伝えられたものと推測される。アルハーリス・ブヌ・ヒッリザの長詩47行にもイバードが取り上げられている。ラフム朝の歴史の詳細は不明であるが、前記ヒシャーム・ブヌ・ムハンマド・アルカルビーは王朝期間522年8ヶ月にわたる20名の王のリストをあげている。

ラフム朝の王はアムル・ブヌ・アディー・ブヌ・ナスル・ブヌ・ラビーア・ブヌ・ラフム (ʿAmr b. ʿAdī b. Naṣr b. Rabīʿa b. Lakhm)。彼の後継者の詳細は不明であるが、5世紀前半にアルヒーラの近くにハワルナク (Khawarnaq) という宮殿を建てたアンヌアマーヌ (al-Nuʿmān) 1世の名が次に登場してくる。この王はアルアウワル (al-ʿAʿwar) というあだ名で呼ばれている。この宮殿はサーサーン朝のヤズデギルド1世が王子バフラム・ゴール (Bahrām Gōr) のために建てさせたものと伝えられている。6世紀の初めになるとアルムンジル・ブヌ・マーイ・アッサマーウ (al-Mundhir b. Māʾ al-Samāʾ), 即ち、アルムンジル3世の治世となる。この王はアルハーリス・ブヌ・ヒッリザの長詩79行にあげられている。王の名マーイ・アッサマーウという部分は“天の水”の意味であるが、彼の母の名 Mariya または Mawīya がなまったものともされている。彼は一時キンダ王家のアルハーリス・ブヌ・アムルに王座を奪われるが、まもなく復帰しキンダ王国を滅ぼす。これについてはイムルウ・ル・カイスのところで触れた通りである。

アルムンジル3世はビザンツ帝国のシリア領を蹂躪しアンチオキア辺りまで攻め込んだ。これに対してユスチニアヌス帝はガッサーン朝のアルハーリス・ブヌ・ジャバラ (al-Hārith b. Jabala) 王に対抗させた。ビザンツの前線緩衝国家ガッサーンとペルシャの前線緩衝国家ラフムはこのようにして再三相手領域に侵攻を繰り返したが554年アルムンジル3世は不意打ちを受けて殺された。彼の後にはアムル・ブヌ・ヒンド (ʿAmr b. Hind 在位554-569) が継いだ。彼の治世時にアルヒーラは文学の中心地となり、アラブの多くの詩人をひきつけた。タグリブ族の族長兼詩人アムル・ブヌ・クルスウムが、母が侮辱されたとして殺害したのがこの王である。彼の後、息

子のカーブース (Qābūs)、および同アルムンジル4世が短期間王位を継いだ。ラフム朝最後の王はアルムンジル4世の息子アンヌアマーン3世 (al-Nuʿmān ʾAbū Qābūs 在位 580-602又は585-607) で、多くのアラブの詩人を保護したことで有名である。

ガッサーン

イエーメン系の南アラブのアズド族の末裔がシリアに移住して興した王国で単性説派キリスト教を信じ、ビザンツ帝国の宗主権のもとペルシャ帝国の緩衝国家ラフム朝と対立抗争を繰り返していた。支配領域はシリア、レバノン、パレスチナおよびアラビア半島の一部にわたっていた。特定の地に都を持たず、パレスチナ南部のジャウラーン (Jawlān)、ジャービー (Jābiy) あるいはダマスカス近くのジリーク (Jilliḳ) などを拠点としていたようである。この王朝については年代記作家たちも詳しくは伝えていないが、北に移住したアズド族がアムル・ブヌ・アーミル・ムザイキーヤ (ʿAmr b. ʿĀmir Muzayqiya) という者に率いられてシリア砂漠のガッサーン湖の周辺に住み着いた。王国を築いたのはアムルの息子ジャフナ (Jafna) であったといわれている。存在が確認されている最初のガッサーン王は、アラブの詩人たちともかかわりあいの深いアルハーリス・ブヌ・ジャバラ (al-Ḥārith b. Jabala) で、熱烈な単性説派キリスト教の保護者であった。554年にラフム朝のアルムンジル・ブヌ・マーイ・アッサマーウ王を殺して勝利を納めている。彼は569年又は570年に没した。彼の後を継いだのは息子のアルムンジルで、580年ラフム朝の都アルヒーラに侵攻して町を焼き、大量の戦利品を奪った。しかし581年にはビザンツ側に捕らえられ、これに怒ってビザンツに反旗を翻した息子のアンヌアマーンも敗れガッサーン朝は事実上滅んだ。

キンダ

キンダ王家は南アラブ系の部族に属しハド라마ウト西部に住んでいた。一族の中で最初に歴史に名を留めているのはフジュール・ブヌ・アムル・ブヌ・ムアーウィヤ (Ḥujr b. ʿAmr b. Muʿāwiya 別名 ʾĀkil al-Murar) である。彼はヒムヤル王、ハッサン・トッバア (Ḥassan Tubbaʾ) の異母弟であった。彼の息子のアムル・ブヌ・フジュール (ʿAmr b. Ḥujr) は、王宮で人質として近習していた。王はアラビア半島内部に遠征し多くの部族を征服して帰還すると、征服した部族の支配者としてフジュール・ブヌ・アムルを起用した。フジュールの後、息子のアムル・ブヌ・フジュールが支配者となり中央アラビアの諸部族を統治した。アムルの息子アルハーリスの頃には中央アラビアで事実上の独立王国となっていた。アルヒーラのラフム朝の王座を一時奪ったのはこのアルハーリスである。彼の死後キンダ王国は4人の息子らによって分割統治されたが、互いの勢力争いや、ラフム朝の圧迫を受けキンダ王家の権威は失われた。アルハーリス王の息子でアサド族を統治したフジュールは詩人イムルウ・ル・カイスの父である。

(以上は R.A. Nicholson, *A Literary History of the Arabs*. や *Encyclopaedia of Islam*. な

どによった。)

(二)

ジャーヒリーア時代の作とされるカスィーダ (qaṣida) は韻律、修辞、言語いずれの面から見ても完成度の高いもので、それまでに長年にわたる成長過程があったに違いないが、詳細は歴史のなかに埋もれて明らかにすることはできない。この時代の詩はラーウィー (rāwī) とよばれる職業的口伝家により代々語り伝えられた。こうして語り伝えられた古詩は8世紀後半以降盛んに収集され編纂されるようになった。主要な古詩集には次のようなものがある。

- 1) アルムアッラカート (*al-Mu‘allaqāt*), 編者: ハンマード・アッラーウィヤ (Ḥammād al-Rāwīya 771没)
- 2) アルムファッダリーヤート (*al-Mufaḍḍaliyāt*), 同: アルムファッダル・アッダッビー (*al-Mufaḍḍal al-Ḍabbī* 780没)
- 3) アルアスマイーヤート (*al-ʿAṣmaʿiyyāt*), 同: アルアスマイー (*al-ʿAṣamaʿī* 828没)
- 4) ハマーサ詩集 (*Diwān al-Ḥamāsa*), 同: アブー・タンマーム (ʿAbū Tammām 845没)
- 5) 歌の書 (*Kitāb al-ʿAghānī*), 同: アブー・アルファラジュ・アルイスバハーニー (ʿAbū al-Faraj al-ʿIsbahānī 972没)
- 6) 詩と詩人たちの書 (*Kitāb al-Shiʿr wa al-Shuʿarāʾ*), 同: イブン・クタイバ (ʿIbn Qutayba 889没)
- 7) イブン・アッシャジャリー詩選集 (*Mukhtārāt ʿIbn al-Shajārī*), 同: イブン・アッシャジャリー (ʿIbn al-Shajārī 1148没)
- 8) アラブ詩全集 (*Jamhara ʿAshʿār al-ʿArab*), 同: アブー・ザイド・アルクラシー (ʿAbū Zayd al-Qurashī 10世紀)
- 9) ジャーヒリーア詩人の傑作集 (*al-ʿIqd al-Thamīn fī Dawāwīn al-Shuʿarāʾ al-Jāhiliyyīn*), 同: アルアーラム・アッシャントマリ (al-ʿAʿlam al-Shantamarī 1083没)

ジャーヒリーア詩は代々口伝によったものであるとされているが、すべてイスラム時代につくられたものであるという説が D.S. Margoliouth, *The Origin of Arabic Poetry*. *Journal of the Royal Asiatic Society*, 1925. や Ṭā Hā Ḥusayn, *Fī al-ʿAdab al-Jāhili*, 1927. によってなされたこともあるが、その後の論争を経て今日では、一部に後世の要素が紛れ込んでいるかもしれないが、全体的に見てジャーヒリーアのアラブ精神を反映した偉大な民族的文化遺産であると認められている。

アラブ古詩は (1) コーランの文言解釈の例証になる。(2) ジャーヒリーア時代のアラブの歴史記録である。(3) 反アラブ論争に利用できる、などの目的のもとに熱心に研究された。

コーランはアラブ文学史上最古の記録された作品であるが、口伝によるものとはいえ、イスラーム直前の古詩は語法や文体などコーランの文言解釈の有力なよりどころとされてきた。加えて古詩は預言者ムハンマドが生まれ育った当時のアラブ社会の状況を知る上でも欠くことのできない資料とみなされた。アラブムスリムのこのような取り組み方に対して、非アラブでイスラームに改宗した者達、その中核をなしたのはペルシャ系の人々はアラブ古詩を反アラブ宣伝の論拠にしようと試みた。預言者ムハンマドはイスラームのもとでは信者はすべて兄弟であると説いている。コーラン49章10節には、“信者たちは兄弟である。それゆえ汝らは二人の兄弟の間を融和せよ。”とある。しかしムハンマド以後、アラブは周辺への征服者となり、非アラブの目にはアラブが尊大な者として映った。アラブは神が彼らの中から使徒ムハンマドを遣わし、アラビア語で啓示を受けた。これによってアラブは非アラブに対して尊大に構え見下し、非アラブをアジャム (‘ajam)、即ちわけのわからぬ言葉をしゃべる者達と呼んでいる。しかしながら非アラブはより優れた文化遺産を受け継いでいる、アラブは預言者とコーランを除けば粗野で非文明的な生活をしてきたなどと主張し、彼らはこれを裏付けるものとしてジャーヒリーア詩を掘り起こしアラブを中傷する運動を始めた。この運動はシュウビーア (shu‘ūbiya) 運動と呼ばれた。それはコーラン49章13節 “人々よ、われらは汝らを一人の男と女からつくり、民族 (shu‘ūb) と部族としたが、これひとえに汝らが互いに知己となるためである。神のもとにおいて汝らのなかで最も尊い者は神を最も畏れる者である。” に依拠した用語であった。アラブは奴隷を解放すると、奴隷のとき主人であった者のマウラー (mawlā 複数 mawālī, 庇護民) として部族員に加えていた。詩人アンタラ・ブヌ・シャッダードがこの例に当たる。この伝統的な習慣がイスラームに改宗した非アラブをイスラーム共同体に受け入れる場合に応用された。少なくともイスラーム後1世紀ウマイヤ朝末期 (740年頃) まではこのような部族的習慣が続いていた。このため多くのマワーリーが生まれ、イスラーム帝国の各分野で活躍することになった。彼らの中にはアラビア語を学びアラブよりも優れた業績を上げるものもいた。アラブとの優劣論争に勝つためにジャーヒリーア詩を編集したり、注釈をつけたりした者の多くは非アラブムスリムであった。彼らのおかげでジャーヒリーア詩が今日伝えられた側面は見逃せないであろう。この分野で古詩を良く伝えたマワーリーにはアブー・ウバイダ (ʿAbū ʿUbayda 825没)、アルアスマイー (al-ʿAṣmaʿī 828没)、イブン・クタイバ (Ibn Qatayba 889没)などで、彼らより後に出て『歌の書』という大著を残したアブー・アルファラジュ・アルイスバハーニー (ʿAbū al-Faraj al-Isbahānī 972没) はこれら先達のマワーリーの伝えた資料に大幅に依拠している。

(三)

ジャーヒリーア時代の詩はアラブの部族社会の生活を生き生きとよみがえらせている。この社会においては部族の成員のみが敵対部族に対して保護を受けることが出来た。復讐戦への参加や戦利品の分配にあずかるのも部族の構成員に限られてい

た。このような部族社会において詩が果たす役割は大きかった。詩は詩人の個人的感情を表現するものというよりは、部族の主張を代弁するものであったと言える。このため詩人は部族のスポークスマンであり、部族内での地位も高く、有力な指導者であった。また優れた詩人によって風刺された部族は癒しがたい痛手を受けると信じられていた。

アラブの古詩は数行からなる断片詩と100行前後に及ぶ長詩の2種がある。後者はカスィーダ (qaṣīda) と呼ばれるもので、アルムアッラカート¹の長詩がその典型をなすものである。カスィーダの際立った特徴は話題の配列順序や韻律、脚韻などが厳格なルールに従っており、無限と思われるほど隠喩が多用されている点にある。平易な語彙はほとんど用いられていない。韻律は長短かくの16種の正調を基本に、いくつかの変調が認められており、詩人はそのひとつを選んで詩作する。脚韻は1行目の上の句と下の句をそろえ、2行目以下は下の句の脚韻を1行目と同じものとして統一する。

長詩は、愛を語る序詞 (nasīb という)、ラクダでの旅、および主題の3部分からなるのが普通で、最後に格言的詩句を加えたものもある。ナスィーブでは常にかつての恋人の住まい跡を訪れて追憶にひたって泣く場面が語られる。現在の愛を語るものは見当たらない。即ち、今や年老いた男が砂漠をラクダに乗って旅を重ね、昔愛した女性と暮らした場所にたたずみ、楽しかった昔をしのんで泣くという語り口が一般的である。これを、廃墟に立って泣く (al-bukā' alā al-ʿaṭāl) と呼んでいる。イムルウ・ル・カイスの長詩がその典型をなすものである。

ラクダの部分では自分が乗っているラクダの特徴や旅の道中で出会った荒野の動物などについて語られる。序詞におけるかつての恋人への思いを断ち切るためにラクダに乗って気分転換をはかる、と言うことでラクダの描写に移るものもある。ラクダの描写についてはタラファの長詩が優れている。

ジャーヒリーア時代の長詩の主題には風刺 (hijaʿ)、自己または自部族自慢 (ʿiftikhār, fakhr)、王侯など有力者への賞賛 (madḥ)、死者への哀悼 (rithāʿ) などが主なものである。これらの主題がひとつの長詩に同居している場合がまま見受けられている。これらの主題を通じてジャーヒリーア時代の理想的な人物像が浮かびあがってくる。即ち、雄雄しく、忍耐強く、婦女子や貧者などを良く守り、誠実で、気前良く、思慮分別がある、などの性質を備えているのが理想とされている。これとは逆に臆病で弱者を粗末に扱い、食欲な人物は軽蔑され、中傷されている。

なおジャヒリーア詩においては宗教的要素がわずかし表現されていない。ズバイルやラビードの長詩にはイスラームを予兆するような詩句がうかがえるが、偶像神崇拜を語るものはほとんど欠落している。しかし、これは偶像崇拝がなかったことを示すものではないと思われる。おそらくイスラーム時代になって古い詩を集め、編集する過程でジャーヒリーア時代の神々の痕跡を消去してイスラームの唯一神と矛盾をきたさないよう改めたことによるものであろう。カアバ神殿がイスラーム以前から存在していたことはアルムアッラカートでも明らかに認められる。イスラーム

ムはジャーヒリーア時代の偶像崇拜の儀礼のいくつかを取り入れているが、これは古くから宗教が存在していたことを物語るものである。またコーランにはキリスト教やユダヤ教の影響がうかがえるが、これらはそれ以前からアラビア半島内に徐々に浸透していたであろう。

最後にアルムアッラカート7編の概要を紹介すると以下ようになる。

- 1) イムルウ・ル・カイス：タウィール調，脚韻 -li, 82行のナスィーブ（愛の序詞）で始まり、恋の冒険に進む。この部分はファフル（自慢）にあたる。後半は馬を用いたと狩りと嵐の描写となっており、長詩の構成内容としては一般的なものではない。
- 2) タラファ：タウィール調，脚韻 -li, 103行目のナスィーブ、ラクダの描写、ファフルの三部構成。特にラクダの描写と現世における快樂主義の主張が際立っている。
- 3) ズハイル：タウィール調，脚韻 -mī, 59行。ナスィーブとマドフ（賛辞）の二部構成。格言的な詩句が多い。6世紀末のダーヒスの戦いでアブスとズブヤーン両部族を和解させた二人の調停者への賛辞が中心。
- 4) アンタラ：カーミル調，脚韻 -mī, 79行。ナスィーブとラクダとファフルの3部構成。ラクダの描写の部分でダチョウの記述が加味されている。この詩はダーヒスの戦いの最中に詠まれたもので、戦闘における勇者ぶりを誇っている。
- 5) アムル：カーミル調，脚韻 -īnā, 94行。ナスィーブとファフルの二部構成。詩人が族長であるタグリブ族の栄光を謳歌し、敵対するバクル族とラフム朝の王を脅迫している。
- 6) ヒッリザ：ハフイーフ調，脚韻 -āū, 84行。短いナスィーブとラクダとファフルの三部構成。アムルに対抗してタグリブ族を非難しバクル族を褒め称えている。古来、優れた詩ではではないが、タグリブ族のアムルとバランスを取るためこの長詩を詩集に加えたと言われている。
- 7) ラビード：カーミル調，脚韻 -āmūhā, ナスィーブ、ラクダ、ファフルの三部がバランスよく構成されている。野生のロバおよびオオカミの餌食となる野牛の描写があり、詩人自身と自部族を自慢している。

以上のとおりアラブ詩は韻律、脚韻を整えて音楽性豊かであり、読むものというよりは唱えられ、歌われる性質をそなえている。詩人は聞き手に強い感動を与えるために数ある韻律と脚韻のなかからひとつだけを選び出し作詞する。残念ながら拙訳では語句の意味をとらえるのが精一杯で、重視されている音楽的側面は犠牲にせざるを得なかった。